愛媛新聞 2007-11-27

遺族「早く日本に連れて帰りたい」

戦没者の遺骨散乱

地元住民 鉄材売買で船体切断

インドネシア

インドネシア・スラウェシ島(旧セレベス島)南部のマカッサル湾に、日本人戦没者の遺骨が散乱している。第二次大戦中に撃沈された輸送船の乗員たちの遺骨で、鉄材などを売るために船体を切断した地元の住民らが、そのまま放置しているためだという。船体の原形は崩れ、遺骨の散乱に拍車が掛かっており、遺族は「早く日本に連れて帰りたい」と訴える。

インドネシア・マカッサル湾の海底に散乱する遺骨（元国際協力機構専門家の脇田晴之氏撮影）

同湾では戦後未明の一九四五年三月二十八日、マカッサル港の西約五キロの海上で、兵士らを輸送中の「第十一号掃海艇」（六三〇トン、全長七二・五メートル）が米軍機B24の爆撃を受け沈没。乗員三百人のうち、生存者は八十一人、二百十九人は海に没したとされる。

「船の残骸（ざんがい）と遺骨を発見した」。元国際協力機構（JICA）の専門家としてマカッサル駐在経験のある脇田晴之さん（六〇）＝神奈川県在住＝の元に二〇〇五年末、知らせが届いた。

二十四歳で乗員だった実兄の池田二郎さん＝愛媛県出身＝を失った元中学校教諭笠原美代さん（六〇）＝福岡県在住＝らとともに、脇田さんは昨年四月、現地の会社に調査を依頼。海底の写真には、泥土とともに多数の人骨が散乱する様子が映っていた。

海内外は格好のダイビングスポットになっており、米潜水艦の魚雷攻撃で沈没した輸送艦「夏潮」とみられる沈没船からも多くの遺骨が見つかっている。

脇田さんらは昨月、厚生労働省に、第十一号掃海艇の調査報告書や引き揚げられた計器のプレートなどを提出し、正式な調査と遺骨収集を求めた。

厚労省は昨年八月に調査実施を決定。「〇七年度中に現地へ派遣し、インドネシア政府と協議する」（社会・援護局外事室）としているが、実現のめどは立っていない。脇田さんは「いたずらに時間だけが経過し、目に見える進展がない」と落胆している。

沈没船と同型の掃海艇（元国際協力機構シニア専門家の脇田晴之氏提供）